

(2012 年度山西大学奨学生レポート)

留学生生活を振り返って

吉田 想陶

中国山西省への奨学生派遣事業、平成24年度派遣奨学生の吉田想陶（よしだ そうと）と申します。平成24年9月から平成25年7月まで、山西省太原市にある山西大学国際教育交流学院にて語学留学をさせていただきました。

これまでの生活を振り返ったとき、私は外国の方と交流する機会も少なく、言葉の壁を恐れて自らその機会を断っていました。そんな消極的な自分を変えるためにも今回の留学は大きなチャンスであり、海外経験の少ない私にとって現地での生活は貴重な体験の連続で、今後の自身の方向性を定める大きなきっかけの一つとなりました。このような機会を与えて頂き埼玉県、山西省、留学を支援して下さいました皆様には感謝申し上げます。

一年間という期間の中で、言葉も文化も違う慣れない土地での生活に戸惑いや不安もありましたが、長期間海外で生活するという経験は社会人になる前の今の時期にしかできない事だと考え思い切って挑戦しました。

留学の動機

私が山西大学への留学を希望した理由は、物理的な距離も近く、経済規模としても日本を抜き大きく成長している中国という国をもっと知りたいと切望するようになった事がきっかけです。今後の日本は主として人口の減少と高齢化の影響により高い経済成長や経済規模の拡大を望めない可能性が高く、そのような状況において今まで以上に外国との経済交流を深めていく必要があると考えます。

日中関係の緊張が高まりつつある昨今ですが、日本にとって中国という国は経済だけではなくあらゆる面で重要になってくることは疑いの余地が無く、社会に出る前に中国の事をよく理解しておきたいと思いました。しかし、私は大学在学中に全く中国語に触れてこなかったため中国に関して浅い知識しか持っておらず、山西大学入学後は先ず日常会話が出来る程度の中国語の習得と、中国の人々の考え方・価値観を肌身で覚え多様な価値観を身に付けることを目標に留学生活に臨みました。



(山西大学 正門からの風景)

山西大学の国際教育交流学院は、初級・中級・高級の三つのクラスに別れており、私は初級班に振り分けられました。学校が始まり先ず驚いた事が、日本の他に韓国・アメリカ・オーストラリア・イタリア・ドイツ・タジキスタン・アルメニア・イスラエル・カナダという様々な国の学生が山西大学に中国語を学びに来ていたことです。中には太原で仕事をしながら中国語を学んでいる学生や、母国語を教えながら中国語を学んでいる学生もあり、世界的に見ても中国という国が注目されているという事を実感しました。多くの学生が将来中国の大学に進学し中国と関わりのある仕事に就くため努力しており、生活を共にする上でとても刺激を受けました。

多彩なクラスメートが居ましたが、ほとんどの留学生が英語を話せるため、初めの方は会話の共通語が英語でした。初級班の学生の多くは、私と同じようにゼロに近い状態から中国語を学びに来ていた学生が多かったため、共通語が英語になってしまうのは必然的ですが、英語の苦手な私は一刻も早く中国語での会話力を向上させないと留学生間でもコミュニケーションを取るのが難しい、という状況に追い込まれたため自分の意思を伝える為にも中国語での会話力の向上が欠かせませんでした。



(国際教育交流学院に所属する学生と先生)

交流活動

9月の初め頃に山西大学の日本語学科の学生と交流する機会に恵まれ、お互い辞書を片手に交流を深めました。こちらの学生はとても勉強熱心で、積極的に日本語で話しかけてきてくれます。学生の使う日本語のレベルの高さに驚き、私ももっと中国語で話したいという気持ちが高まりました。私が上手く中国語の発音が出来ずに悩んでいることを伝えると、何人かの学生が時間の合うときに中国語の勉強を見てくれることになりました。まだまだうまく話すことができない私にとって、とてもありがたいことです。机に向かって勉強することも基礎をつくる上では大切な事だと思いますが、せつかく中国にいるのだから授業以外の時間においても中国語を使う環境に身を置き、たくさんの人々とコミュニケーションが取れるよう会話力の向上に努めたいと身の回りの環境に奮起させられました。中国語学習においてどのような事が大切か？と友人に訪ねると、よく言われた言葉が「多听多说 duo ting duo shuo」(たくさん聞いてたくさん話すことという意味)という言葉です。消極的にならず積極的にたくさんの人と交流することが生きた中国語を学ぶ近道だと実感しました。

9月の半ば頃、日中間での钓鱼島(尖閣諸島)をめぐる問題で、2週間程日本人学生と韓国人学生(日本人に間違われる可能性があるため)に対し外出禁止令が出されました。実際に学外では「钓鱼島是中国的(尖閣諸島は中国の物だ)」といった張り紙やステッカーを目にすることもありました。また中国に来たばかりという事もあり、買い物中やタクシーの中で「あなたは日本人ですか」と聞かれた際に「日本人と答えていいのか」「なんて答えるべきなのか」など返答に困ることもありましたが、私自身は人と接する上で反日感情を覚えることは特になく、日常生活に問題はありませんでした。今の私に理解できることはそう多くないと思いますが、多様な価値観を実感として知覚することが大切であり、緊張感の高

まりつつある日中関係をリアルタイムで体感できたということは非常に貴重な体験であったと感じています。

10月の半ば頃に「第三十二届 希望杯 篮球联赛」というバスケットボールの大会が山西大学で開かれました。この大会は各学院対抗での試合となっており、私たち留学生が所属する国際教育交流学院も参加しました。各学院それぞれが太鼓や応援旗を用意し、多くの学生が一生懸命応援している姿がとても印象的で、学生の団結力に驚かされたのを覚えています。スポーツを通じて多くの学生と交流できたことはまだ中国語で円滑にコミュニケーションがとれない私にとってとても貴重な体験であり、改めてスポーツには言葉が通じなくてもお互いに通じ合える力があると感じました。



(バスケットボール大会 赤のユニフォームが国際教育交流学院)

太原では、秋と春の季節がとても短く、11月を過ぎると、日本の真冬の様な気温になりました。日中も気温が上がらず一日中零下の日もあり、11月の半ば頃には太原に今年初めての雪が降りました。屋外は非常に寒いのですが、屋内には暖气(又アンチー)と呼ばれる蒸気や熱湯を利用した暖房器具が設置されているためそれほど寒さを感じません。

少しずつ授業にも慣れてきたこともあり、もっと様々な行事に参加し交流の場を広めたいと考え日本語協会(山西大学で日本語を勉強している学生のサークル)の勉強会に参加しました。日本語協会の勉強会では日本語学科の学生だけではなく、他学科の日本に興味を持つ多くの学生が勉強に励んでおり、日本語学科の学生や自主的に日本語を勉強してきた学生が勉強したい学生に対し教えるといった活動を行っていました。活動内容は1時間の座学の後1時間日本のアニメやドラマをみんなで鑑賞するといったもので、多くの学生が日本のアニメや漫画に興味

を持っており、アニメや漫画を通し日本の文化に興味を持ってもらえるという事は日本人の私にとって嬉しいことです。

中国では、旧暦の1月1日、(今年は2月10日)が「春節 chun jie」(新年)とは聞いていましたが、「実際に西暦の1月1日は中国の人々にとってどのような感覚なのだろうか？」と疑問に思い友人に話を聞いてみました。友人の話では中国では旧暦に基づいて新年を祝うため、西暦での1月1日はあまり重要視されていないそうです。最近では外国文化に触れる機会も増え、若い人達の間では12月31日の夜に友人と集まって新年を迎える人もいと聞きました。

中国では旧暦の1月1日が重要視されていて、西暦の1月1日には新年のお祝いムードはあまり感じられません。一般的には春節の前に実家に帰って家族と過ごすようで、前日の夜(今年は2月9日)には花火や爆竹を鳴らして新年を祝い最も盛り上がります。実際に夜中の12時が近づくと花火や爆竹が激しさを増し、室内にいたにも関わらず会話が困難なほどの騒音でした。



(左：春節の花火 右：初級班のクラスメート)

4月に入り授業中に各国の特徴や文化を紹介するといったプレゼンテーションが行われました。中国以外の国に行ったことのない私にとって、各国の留学生から自国の話を聞くことができたことはとても新鮮で、日本に居た時には名前しか知らなかった国も、クラスメートの母国となると自然と興味が湧いてきます。このような体験は、留学生活ならではの貴重な体験ではないでしょうか。このプレゼンを通して改めて感じたことは、自国の文化や考え方と異なる価値観を理解するためには、自国の価値観を基準とした偏ったものの見方をせずお互いに認め合うことが大切だということです。しかし頭では分かっているものの、理解しがたい文化の違いに直面すると、なかなか素直に受け入れることができない自分もい

ます。新しい文化や人に触れ刺激を受けること、各国の留学生や現地の方々と交流を深めること、このような体験を通し自身の視野や意識を広げることがグローバル人材に必要な事だと思います。

留学生活の中で思い出として色濃く残っている活動は6月20～21日の二日間、友人の紹介を受け太原テレビ局の「冲关大峡谷」(chong guan da xia gu)という番組に同奨学生の神谷君と出演した事です。この番組は出演者が湖の上にある様々なアトラクションに挑戦し、時間内にゴールを目指すといったもので、ゴールした後の残り時間で順位を競うバラエティー番組です。



(挑戦したアトラクション)

私の中途半端な中国語能力で大丈夫なのかと不安もありましたがまたとない機会だと思い参加しました。今回の参加者は私と神谷君を除きすべて中国の方で、私達が日本人だと分かるとみんな積極的に話しかけてきてくれました。ただ、私の実力不足で円滑にコミュニケーションを取ることができず、自分の理解力、表現力の乏しさに苦い思いもしました。2日目の午前中にアトラクションに挑戦したのですが、私も神谷君も結果湖に落ちてしまい成功することができませんでした。不甲斐ない結果に終わってしまいました。素晴らしい思い出です。また、インタビューを受けた際に日本のどこから来ているのか気かれた為、埼玉県から来ていることや山西省と友好提携を結んでいる事を紹介することもできました。

この2日間をきっかけに新たに多くの人と知り合い、良い友人関係を築く事ができました。人と人との繋がりを大切にし、太原に再訪した際には彼らの元を訪れたいと思います。

この1年間、留学を通し実際の中国文化、異なる価値観を肌で感じることで留学前に比べると中国に対する印象や考えも大きく変わりました。また多種多様な

国から来ている留学生と交流を深めることで、その土地の文化や風習を知り、お互いの違いを認め合い理解しあえる最高の仲間とも出会うことができました。

私は9月から再び中国に赴き、今度は上海で1年間語学留学を行います。今回の留学で得たものを活かし、さらなる語学力の向上を目指すとともに親善交流の続きを担い、気を引き締めて取り組む所存です。また、太原では実現することの出来なかった剣道を通じた日中交流にも取り組み新たな挑戦も始める予定です。

最後になりますが、埼玉県職員の皆様、山西大学関係者の皆様、1年間共に学んだ同奨学生、留学生の方々などお世話になった沢山の方々に感謝申し上げます。このような大変貴重な機会を頂き本当にありがとうございました。